

農業と科学

1981
7

GHISSO-ASAHI FERTILIZER CO., LTD.

農業生産はほぼ回復 農業経済も改善されよう

～ことしの農業観測から～

農林水産大臣官房調査課
高橋 善一

以下は、6月19日に農林水産省が公表した「昭和56年度農業観測」による農業をとりまく情報及び農業経済の見通しについての概要である。

1. 農業をとりまく情勢 (国内経済)

55年度の国内経済は、民間設備投資、輸出は増加したものの、個人消費の停滞などにより、その拡大テンポは緩やかなものとなった。

56年度の農業観測は、「政府経済見通し」を前提として行方。「政府経済見通し」では、経済成長率は個人消費の回復などから、前年度の伸びを上回るものと見込まれており、また、卸売物価は上昇率が大きく鈍化し、消費者物価も安定化傾向が定着するとみられている。

(農業就業人口)

農業就業人口は、55年度に入り、高齢化による引退等に加え、雇用情勢が比較的安定して推移するもとで農家経済に厳しさが増した事もあり、6.8%の減少となった。

56年度は、農業就業者の引退等、自然減や雇用情勢の改善が見込まれるものの、農家経済が前年度に比べれば改善されるとみられることからみて、前年度に比べやや減少するとみられる。

(農業生産資材価格)

農業生産資材の農村価格は、54年度には原油価格の上昇、円安、一般卸売物価の上昇等の影響から、年度中の上昇は大きなものとなった。55年度に入り、一般卸売物価の動向等を反映して、騰勢は次第に鈍化の傾向で推移したものの、年度間では前年度を11.6%上回った。

56年度については、需要面からの価格上昇要因は乏しく、また最近の卸売物価の動向等からみて、コスト圧力はわずかなものになるとみられる。これらのことからみて、海外原材料価格、円相場の動向等なお不確定な要

因はあるものの、主要資材は当面安定的に推移するとみられ、農業生産資材価格(総合)の年度中における上昇はわずかなものとなり、年度間では前年度をやや上回る程度と見通される。

(海外農産物需給)

1980/81年度については、小麦は、生産が増加したものの、在庫率の低下などから、需給はやや引き締まったものとなっている。飼料穀物は、アメリカ等の減産による在庫率の低下などから、需給はひっ迫気味で推移している。大豆は、アメリカの減産などから、需給は前年度に比べればやや引き締まったものとなっているが、在庫は比較的高い水準で推移している。

1981/82年度については、今後の天候、作柄の推移等にもよるが、①小麦は、生産の増加等から在庫率はある程度改善されると見込まれ、需給が更に引き締まる可能性は小さいとみられる。②飼料穀物は、生産の回復などから在庫率がある程度上昇し、需給は前年度に比べればやや改善されるものと見込まれる。③大豆は、南半球の生産動向にもよるが、アメリカの生産が大きく増加し、在庫が引き続き比較的高い水準で推移するとみられ、需給が大きくひっ迫する可能性は小さいとみられる。

また、今後の価格動向については、小麦、大豆は当面比較的安定して推移し、とうもろこしも、当面現在水準より更に大きく上昇することはないとみられるものの、

<7月号目次>

- § 農業生産はほぼ回復し
農業経営も改善されよう……………(1)
～ことしの農業観測から～
農林水産大臣官房調査課 高橋 善一
- § 水稻育苗に対する
硝酸系コーティング肥料の効果……………(3)
農林水産省北陸農業試験場
環境部土壌肥料第2研究室 伊藤 滋吉
- § 早熟ナスに対する
コーティング肥料の効果……………(5)
京都農業改良普及所
科 長 山内 幹雄
- § イチゴの新品種について②……………(7)
「てるのか」の特性と
栽培上の問題点
農林水産省野菜試験場久留米支場
育種第2研究室長 本多 藤雄

今後の作柄等の動向等に十分注意していく必要がある。

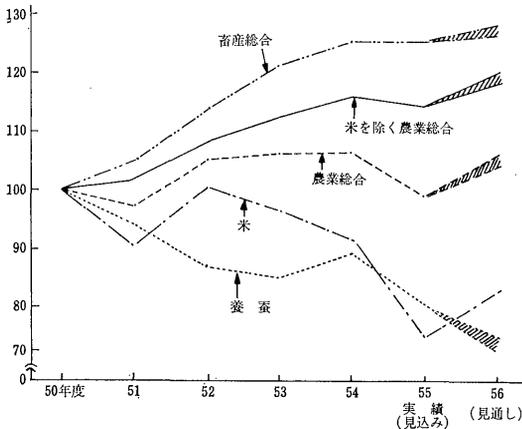
2. 農業経済の見通し

(農産物需要)

最近の食料消費は、個人消費の緩やかな伸びのなかで伸び悩みの状態を続けている。55年度は、実質消費が減少するなかで、食料品消費者価格の相対的な落ちつきもあって、1人当たり実質食料費支出は、55年4月～56年2月間では、前年同期比0.3%増となった。

56年度については、実質民間最終消費支出は前年度の伸びを大きく上回る4.9%程度の増加と見込まれていること、農産食料品の消費者価格は、小幅な上昇にとどまるものと見込まれることを前提とすれば、実質食料費支出の伸びは、前年度の伸び(1.5%程度)を上回る2～3%程度と見込まれる。

農産物の動向(指数, 50年度100)



(農業生産)

55年度の農業生産は、全国的な冷害の影響により、耕種生産と繭生産がかなりの程度減少したことに加え、畜産生産がほぼ前年度並みにとどまったことから、農業生産総合では7.0%減少した。

56年度は、⑦米は10%程度の増加、④米を除く耕種生

産は、麦、豆類、果実等の増加でかなりの程度増加、②繭生産はかなり減少、③畜産生産はわずかな増加と見込まれ、農業生産総合ではかなりの程度増加し、冷害による前年度の落ち込みからはほぼ回復すると見通される。

なお、耕種及び繭生産は、気象条件によって大きく影響を受けるが、今後の天候には十分留意するとともに、技術面での適切な対応を進めていく必要がある。

(農産物価格)

55年度の農産物価格は、農産物需給の緩和基調が続くなかで、前年度を3.5%上回った。

56年度については、⑦畜産物は前年度をわずかに上回り、④果実について、表年に当たるみかんは大幅に下回るが、生産減のりんごはかなり上回り、⑦野菜については、夏秋野菜が生産の回復から前年同期をかなり下回り全体でも前年度をわずかなしやや下回るとみられる。以上等からみて、米、麦を除く農産物価格は、ほぼ前年度並みと見通される。

(農家経済)

55年度(55年4月～56年2月間)における農業所得は農業粗収益が冷害により大きな被害が発生したことなどから、わずかな減少となったことに加え、農業経営費がかなり大きく増加したため、前年同期比17.0%の減少となっている。他方、農外所得は7.9%の増加となり、農家総所得は3.9%増と、前年度の伸びを下回っている。

56年度の農家経済については、⑦農業総産出額は、農業生産及び農産物価格の見通しからみて、かなりの程度増加するとみられる。①物的経費は、資材の投入、価格、固定資産の償却等の状況からみて、やや増加にとどまるとみられる。以上から、補助金を含めた生産農業所得はかなりの程度増加するとみられ、1戸当たり平均でみた農業所得は、大きく落ち込んだ前年度に比べれば、かなり大きく増加するとみられる。

他方、農外所得は、一般賃金の動向等から前年度並みの伸びが見込まれる。農家総所得では、鈍化した前年度の伸びを上回り、かなりの程度増加すると見通される。

昭和56年度主要農産物価格の見通し(単位:卸売価格 円/kg)

	実数又は指数			対前年度騰落(▲)率(%)			
	53年度	54	55(実績見込み)	53年度	54	55(実績見込み)	
牛乳	102.2	101.3	99.6	1.0	▲0.9	▲1.5	前年度並みないしわずかに上回る
牛肉(乳おす)	1,313	1,457	1,274	5.0	11.0	▲12.6	前年度並みないしわずかに下回る
豚肉	683	612	661	▲7.2	▲10.4	8.0	前年度をややないしかなりの程度上回る
プロイラー	288	284	300	▲9.7	▲1.4	5.6	前年度をややないしかなりの程度上回る
みかん	137	99	142	29.2	▲27.7	43.4	前年同期を大幅に下回る
りんご	272	283	235	43.9	4.0	▲17.0	前年同期をかなり上回る
野菜	129	157	162	3.2	21.7	3.2	春野菜は前年同期をかなり上回り、夏秋野菜はかなり下回り、秋冬野菜はややないしかなりの程度下回る
繭	2,268	2,178	2,157	16.7	▲4.0	▲1.0	前年度をやや下回る